

かいたくしいしかりかんづめしよ

開拓使石狩缶詰所

開拓使は、北海道で産業を振興させるため、「札幌麦酒醸造所」（後のサッポロビール）や「札幌味噌醤油醸造所」、「真駒内牧牛場」など全道各地で多くの官営事業を行いました。石狩に開設された「開拓使石狩缶詰所」もその一つです。缶詰工場はほかに別海や厚岸、エトロフ島など5ヶ所に建てられましたが、日本で最初にアメリカ製の製缶機や製造機械を導入し、本格的な缶詰の生産を始めたのは石狩缶詰所でした。



石狩缶詰所で事業が始まったのは、明治10（1877）年10月10日のことです。工場は、石狩川左岸河口近くの船場町（旧石狩町役場跡、現在の石狩市観光センター付近）にあり、敷地面積はおよそ1,300坪ありました。敷地内には製造工場と倉庫、職人が寝泊りする宿舍や鍛冶場、氷室などが配置されていました。工場に設置された缶詰製造用の機械は、アメリカより330ドルで購入した手動式のものでした。従業員は所長（石橋俊勝）のほか、アメリカ人技師U.S.トリート（当時66歳）と助手W.S.スウェット（同25歳）、開拓使の役人、そのほか11人の伝習生、ブリキや鍛冶職人など、総勢19人で操業にあたりました。また製造の技術は、トリートが伝習生に指導し、彼らが生産を担いました。

製造された缶詰は、東京や横浜はもとより、遠くアメリカやフランスの万国博覧会に出品するなどして、好評を得ました。しかし、当時は国内での需要は少なく、製品はおもに欧米へ輸出されました。

明治11（1878）年4月、U.S.トリートが開拓使長官に報告した文書によると、石狩工場生産された製品は、明治10年10月から翌年3月までに、サケ12,092缶、スモークサーモン769本、カキ3,226缶、シカ肉9,358缶、牛肉222缶、などとなっています。

その後、明治13（1880）年にフランス製の缶詰用蒸気器を購入、サケの酢漬缶詰の試作に成功し、翌14年の生産高はおよそ8,100缶、その生産額は1,100円となりました。

石狩缶詰所は、明治15（1882）年に開拓使が廃止されて三県が設置されると農商務省へ移管、さらに16年には北海道事業管理局へ、さらに19年には北海道庁所属となりますが、この年に官の事業としての操業は中止され、わずか10年ほどの歴史に幕を閉じました。

明治20（1887）年、民間に払い下げられた工場は高橋儀兵衛（後に「高橋合資会社」）が引き継ぎ、資金や人材不足などの課題を抱えながらも、石狩での缶詰生産事業は明治45（1912）年まで存続されました。

★クラーク博士と石狩

石狩缶詰所が創業する1年前、札幌農学校教頭のクラーク博士は石狩を訪れ、出島松造（石狩工場でアメリカ人技師の通訳）とサケの缶詰を試作しました。クラーク博士が7缶、出島松造が18缶を製造したという記録が残っています。なお、10月10日は「缶詰の日」。開拓使石狩缶詰所の創業日を記念し、日本缶詰協会は昭和62（1987）年に制定しました。

（木戸口道彰）

- （1）石狩町（1985）石狩町誌／中巻1. 石狩町.
- （2）札幌市教育委員会（1981）さっぽろ文庫19／お雇い外国人. 北海道新聞社.
- （3）鈴木トミエ（1996）石狩百話. 石狩市.